

仏様のおはなし新シリーズ第117集「聖徳太子のお心」

浄土真宗の宗祖親鸞聖人は、生きた時代は違いますが、聖徳太子のことをとても敬っておられました。親鸞聖人はご和讃の中で

「和国の教主聖徳皇 広大恩徳謝しがたし」（聖徳太子は日本にお生まれになられたお釈迦様であり、その広大な御恩は計り知れない）と讃えています。太子が仏教を信奉されていたお陰で日本に仏教が根付き、私たちも仏様に合掌し、み教えを聞くことができているのです。

聖徳太子といえは憲法十七条が有名です。その中の第二条に「篤く三宝を敬ふ」とあります。三宝とは「仏様」、「仏の教え」、「教えを聞き実践する仲間」のことです。この三宝によつてこそ「我」に執らわれて生きていく人間の姿を知らせ、人、時代、場所を選ばず私たちの最終的な「帰（よりどころ）」になるのだと太子は強くお勧めになっています。

また、第十条には

「かれ是んずればすなはちわれは非んず、われ是みすればすなはちかれは非んず、われかならず聖なるにあらず、かれかならず愚かなるにあらず、ともにこれ凡夫ならくのみ。」

とあります。前半部分は、相手が正しいと言うときは自分は間違っており、自分が正しいと言うときは相手は間違っているという意味です。自分だけが正しいという「我」に執らわれた心から争いが生まれるのです。後半部分は、自分は必ずしも聖者ではなく、相手は必ずしも愚者ではなく、ともに不完全な凡夫（ただびと）であるという意味です。お互いにどんな過ちを犯すかも分からない存在だと知らされるところには、はじめて愚かで弱い凡夫と

して「ともに」生かされる道が恵まれるのだと思います。コロナ禍の中、是非かという自らの強烈な主張によつて、私たちはお互いに苦しみをより一層深めているのではないのでしょうか。

今年には聖徳太子の一四〇〇回忌に当たります。太子は激烈な権力闘争の中で、真に人間を育て支え得るのは仏のみ教えなのだ、日本ではじめて宣言してくださいました。親鸞聖人の慕われた聖徳太子のお心を改めて尋ねたいと思います。

